

香取遺産



城山1号墳の
金銅装馬具
vol.177

馬具とは、人が馬に乗るときに必要な装備の総称で、古墳時代に、乗馬の風習とともに大陸から伝来しました。小見川地区の城山1号墳からは、豪華な金銅装の馬具一式が出土しています。

金銅とは、銅に鍍金(金メッキ)を施したり、金箔を押したりしたものです。城山1号墳の馬具は、鉄の地金に金銅板を重ねて貼り付けた「鉄地金銅張」という技法で作られています。

写真①は、くらの飾り金具で、上が後輪、下が前輪に付けられたものです。写真②は口に装着するくつわで、口にかませる銜とその両端に付く円形の鏡板、手綱に連結する引手からなります。写真③～⑤は、面繫・胸繫・尻繫といった革帯に付けられた飾り金具です。③④は革帯が交差する部分を固定する金具で、③を雲珠、④を辻金具と呼びます。⑤は胸繫や尻繫に付けた杏葉という飾りで、環の内部に斜格子文が透かし彫りされています。また、直径2.5cm前後の金銅製の鈴もあり(写真⑥)、胸繫などに付けた馬鈴の可能性があります。

古墳から出土する馬具の場合、木や革の部分は腐朽し、金属部分のみ残っているのが大半です。そのため、どのように馬に取り付けたか不明な点もありますが、馬の埴輪に馬具が表現されている例から、その装着方法を復元することができます。

本古墳の馬具は、一部に鍍金が残るのみですが、本来は金色に輝く豪華なものでした。甲冑を身にまとい、金色の馬具を装着した馬にまたがる姿は、まさに王者として、当時の人々の目に映ったことでしょう。出土品は、市文化財保存館(いぶき館2階)で常設展示しています。

